

正倉院展の切符をいただいた、封書の中に2枚入っていた、明日にでも早速行こうと奈良在住の小林先生に連絡、「同道しませんか」「いくいく」ということで、近鉄奈良駅の改札口で会い二人並んで歩きだした。「聖武天皇だね」「？」解説を読むと先生の言うように、聖武天皇の死を悼んで、后（きさき）が彼の遺愛品を東大寺に、今は大仏さんという名前で親しまれている盧舎那仏に供えた。その品々が東大寺の正倉（現正倉院）に、その後、后が奉納した品々、東大寺の仏具等を加えた宝物が1000年以上保存され、今に至っているということらしい。教科書で、この正倉院は、高床式、校倉造という三角形の木を横に並べた壁なので、湿気やネズミ被害に強く、乾燥時には壁に隙間が開き空気が流れ、宝物がよい塩梅に保管された、と習ったように思う。子供時代、高床式の床下を、ヒトが自由に通っていたと思う、夜そこで寝ていた乞食（今でいうホームレス）もいたように思うが、記憶違いかな。今年が目玉出品の壺が“漆胡瓶（しっこへい）”という。本体が竹籠式と思われていたが、X線写真で、今でも東北で造られている“ブナコ細工”という技法、ブナを紙テープ状の極薄に加工、それを少しずつずらして巻きあげ形を作る。「漆塗りのペルシャ風水差し」工芸品としてはなかなかのものだ。ただ会場は満員で薄暗く、展示ケースの前に行きつけても、薄汚れた骨董品の味わいには苦勞がある、焦点が合わない。壁に貼られた拡大写真の方が見ごたえがあると苦笑。ここにきてやはり残念なのは、オレは古文書が読めないことだ、これが読めれば、理解できれば、もっと楽しめるランと、臍を噛む。

「ちょっと散歩しよう」「バスに乗ろう」「奈良交通は老人パスがあるんだよ」県庁前から天蓋門を過ぎたあたりまでバスの乗客。「北山というんだ」「奈良坂では」「まずこっち わかりにくいところに あるんだ」北山十八間戸・奈良市水道計量器室（レンガ造りの嚴かな小屋）・地藏さん（由緒あるものらしいが・・・）・般若寺（素朴な造りの門が国宝）・牛牧場（搾りたてという牛乳瓶160円を飲む）・奈良少年刑務所（なかなか素晴らしいレンガ造り、使用は今年で終わり 跡を ホテルにするとか おおそう 倉敷アイビースクエヤ風になるそうだ）・松永弾正城跡。「ここは 奈良坂は 昔の街道だ」てなことでぶらぶら、先生地図をとりだした。「これは古地図 売っている これを持って街を歩く 意外と古い地名が 今も残っている」と二人で地図を広げていると、五十代のお姉さん「何を探しているの」と声をかけてくれた「実は 古地図で 街を見ているのですが・・・」「昔の地図はね 山に向かって描くの」「こっちじゃなくて こっちむき」と示してくれた。この辺りは、若草山方面を上にして描いてある。「なるほど 古地図は山が上か あの方 奈良女子大の先生かな 国文か 歴史か・・・」そのあと、「まだ4時だけど」と飲み屋を探し一献。

北山十八間戸を見て、思い出した。ハンセン氏病、ライ病患者が集って自活していたところがあった、奈良坂にあった、「それが それだ」と思いだした。穢多・非人の事を思い出した。昔からライ病患者は伝染病と思われ、患者が家族に、町内に発生すると、お上がやってきてどこかに隔離した。本人も家族も断腸の思いで絆を断ち切り、どこかに隔離された、隔離だけではなく縁を切る、再会できないということなのかも。近代でもハンセン氏病隔離施設が各地にあり、いろいろな物語が、喜怒哀楽を交えいまだに聞かれる。この話が本当かは忘れてしまったが、奈良時代のその昔、ライ病患者を非人におとしめ、集団生活をさせ、奈良坂を通る観光客や、大仏見学客から物乞いをし、その物乞いをした、小銭なり食糧なりで、食いつないでいたと覚えている。ライ病が伝染する病気と思われていたので、人々は一度その病気に罹った人との関わりを恐れた。ライ病患者同士を集め、「乞食となっても 生きよ」という、一種の福祉政策だったのではとも、その著者先生は語っていた。現存する北山十八間戸の建物は、黒瓦葺き本格木造住宅、あの建物の中が18室に分かれているとすれば、刑務所ぐらいの狭さだろうが、お上が非人のために建てる建造物としては立派すぎる。どこかのWEBサイトで、ライ病に罹った貴族の子弟がそこに移り住んだ、奈良の都が垣間見える丘の上で生涯を過ごした、治っても帰らなかった、むしろライ病に対する免疫力ができた彼らは、積極的に次々やってくる新米ライ病患者の看護を、介護をしたとも書いてあるが、これはストーリーの一話かも知れない。非人が乞食をしながら集団で生活する建物は、藁葺きの竪穴式住居、土間に藁を敷いて寝起きし、飲食は土器で煮炊きしたのでは、と想像する。この時代、ホームレスは見かけるが、道路に缶を置いて「どうぞ お恵みを」と物乞いして座っている人は見かけなくなった。オレは、若いころに、小銭を投げかけたことがない、無関心だった・・・。

この3,4年、膝は安定していた。夏の暑い盛りでもタイツを常用していた、タイツを常用している限り、膝は何ともなかった。去年、1年前の夏が終わったばかりのころ、左ひざに違和感があった。この3,4年、「膝は安定している」と過信していた、今から考えればその時点で手を打つべきだった。おそらく何事も、「あの時 ああすれば よかった」の例にもれず、「そのうち治るだろう 改善するだろう」とそのままほおっておいた。徐々に正座ができなくなり、ストレッチも思うように力が入れられず、「なんだか バランスが 悪いな」とは自覚していたが、まだまだ過信があり一年が経った。もう二十日も過ぎてているが、福井県・勝山市の“東山いこいの森”に二泊し、取立山と経ヶ岳をそれぞれ登った。小屋に着いた日の午後から軽い散歩のつもり、「かる～く 取立山へ 登りましょう」その下りに膝をひねった「おかしい 妙に痛い」小屋に帰ってシップを張った。「まさか 明日 登れないなんてことは ないよね」と思いながら酒を飲んで寝た。翌朝、増谷さんが痛み止めと塗り薬をくれた。彼は万年腰痛に苦しみ、2年前には足の靭帯を切っている。痛みには敏感、養生もしている。翌日の山は結構な高さ、薬のおかげか、痛みも感じず難く下山できたが、家に帰っておかしくなってきた。「絶対 医院に 行くように」といわれ「この痛みは ほんまもの 医院に 行かねば」と隣のかん整形外科に駆け込んだ。注射とレントゲン。10年前初めて同じベッドで、膝に注射をしてもらった。注射は普通の注射なみに、チクリと痛いだけだけれど、中をぐるぐるする感覚が妙につらい。大腸内視鏡も同じように、中をぐるぐるする感覚が妙につらい、と思い出した。水を抜き、レントゲンでは異常なし、痛み止めを飲んで翌日にはピタリと治った。翌々日からまたおかしくなり、下半身のバランスまでおかしい、「これは変だ」という感じでダラダラ半月過ぎた。考えるに身体が温かくない、以前は「さあ寝よう」と布団にもぐれば、ほかほかと朝日が出るまでぐっすり眠れた。癖なのか、頭まで布団をかぶって寝る、長身のオレが布団を頭まで被るので足がはみ出る。夜中に足が寒いと身震いすることがよくあったが、すぐにまたぐっすり眠っていた。こんな眠りが若いころからの普通で、だらだら布団の中で安眠をむさぼっていた。1年前から身体がなんだか冷たい、うすら寒くぐっすり寝てられない、「加齢だね」なんて言うてはられない、まだまだ山は登りたい、まだまだあちこちを歩き回りたい、まだまだ絵を描かなくては・・・今はとにかく温める、腹巻もよし、レッグウォーマーもよし、貼る懐炉、電気毛布、なんでも利用しようとして養生中。足腰の痛みはこの「温める」が一番大事。一ヶ所でも痛い、おかしい、というような部位があると全身のバランスが崩れるということを知った。もう、若ぶらず、我慢せず、早めの養生が肝要なり。

先日の“奈良坂”の話の続き。市の人権の会議に出席し色々教わった、十年前、六十歳になったかならないかの頃、人権の会議に度々出席していた。穢多・非人の話に始まり、同和問題、差別問題を教わった。それと並行して、「差別をなくすために 差別をしないために どうすればいいか」ということも教わった。まず、穢多・非人の話、これは歴史の本を読み、庶民の話、農業の話、商業の話、道具造り、器具造り、漁業・狩猟の話、そんな話の中にたくさんの人々が出てくる。もう一つの、「差別をなくすために それじゃどうする」の話、これが面白い、大げさに言えば「オレの人生観を 変えてくれた」というほどに面白い。なんのことはない、「ヒトと仲良くすればいい ヒトの話を聞けばいい ヒトに自分の事を話せばいい」そう、単純にこういうことだ、この単純な話を、宗教は、思想は、難しい言葉を並べ、よけいに複雑にしているのではないのでしょうかと思うほどに、ねじ曲がっている。これらの続きは次回に。

東大寺ができたころ、大仏さんができたころの、奈良坂を覗いてみた。奈良坂は奈良から京都に向かう街道のひとつ、東大寺の天蓋門が発点なら、1キロほど行ったところ、少し坂になっている。ヒトは多かったのか、京に向かう人、京からやってくる人、おそらく当時の人口は今の二桁ほど少ないと見積もって、三々五々の人が歩いていた。どんな衣類を着ていたのか、どんな話し方をしていたのか、何の目的で歩いているのか、どんなものを食べていたのか。男も女も老いも若きもいただろう。着ていたものは麻なのか、獣の皮なのか、街道を歩く人が絹は着ないよね。絵に描かれているようなきれいな着物は、大きな門の屋敷の中にいる人たちだけのもの。話されていたのは日本語だろうが、今聞けば、単語が所々でき取れるぐらいに、今のものとは違っていたのではないだろうか。おしゃべりだったのだろうか、大声で笑い飛ばしていたのだろうか。トイレはないと思う、男も女も木の陰、草の陰で用をたしていただろう。普通に恥ずかしげもなく用をたしていたのでは。街道の隅で、ライ病患者がへたり込んで、物乞いをしている。

徒然草と蜻蛉日記をパラパラ見ている。相変わらず原文が読めない、古文はわからないという体たらくだけれど、何はともあれ、古典にも接しなければ、見向きもしなければ、全く知らない、興味がなくて終わってしまう。教科書でこれらの古典があることは知っていた、ちょっとした“いろは”の“い”の字ぐらいは習ったような気がするが、何が書いてあるか、その味わいは、というところになってくると、全く忘れてしまっている。

まず、徒然草、吉田兼好の作だといわれている、どうも確定していないようだが、これは学者の先生の能書き、徒然草は吉田兼好の作だ。全部で224段の話が載っているそうだ。“徒然草”は、清少納言の“枕草子”鴨長明の“方丈記”と並んで、古典の三大随筆だそうだ。

◎三十五段「字が下手でも、手紙は自分で書く方がいい、直筆がいい。代筆はいけない。」

◎百二十九段「幼い子をからかい面白い人がいるが、子どもには恐ろしい体験だ。病は心から罹るものだ。」

◎八十二段「高貴な人でも酔っぱらいの醜態は見るに堪えない。酒は疎ましいとはいえ、酒飲みは憎めない。」

◎六十八段「ある人が大根を万能薬と信じ日々焼いて食っていた。あるとき敵に襲撃されたが、二人の兵士が助けてくれた。どなた様と聞くと、日々召し上がっていただいている大根ですと答えた。心から信じてください」

◎七十九段「何事も、知っているというふりはしない。自身をわかまえる人は、知ったかぶりをしないのがいい」

徒然草を読んで、今の世にも「こんなおっさん いるねえ」「なにかにつけ ひとこと苦言を申さねばと 書いている方」と笑ってしまう、「なんだ 徒然草は こんなつまらないことを 書いているのか」と多少がっかりもした。「ちょっと道徳的だね」「落語に出てくる文句いいの爺さん 小言幸兵衛だね」「物知りの知識人」「だじゃれ いい」かねえ。「がっかりとは 君い」と叱られそうだが、これも原文で読めれば味わいがぐんと増すのかも。

瀬戸内寂聴著<わたしの蜻蛉日記>私は前々から、蜻蛉日記は今でいう純文学の“私小説”の元祖だと思っています。それに対し源氏物語は、今でいう本格小説に当たるでしょう。なるほど先生うまい事をおっしゃる。蜻蛉日記の内容は全く知らなかったが、“道綱の母”であり、後に閑白に上りつめた堂々の器量人“藤原兼家”の妻の一人、本人も立派な家の娘、ただ名前がわからず、作者は“道綱の母”となっている。自分の生きざま、高い身分の夫、喜び、嫉妬、悲しみ、愛憎が書かれている。こういうドロドロしたもの、家族の話、自身のなどが、文学的に高い質をもって記されている、と聞くだけでぞくぞくする。島尾敏雄、吉行淳之介を思い出す。妻子のある島尾敏雄が、女にうつつを抜かし流れていく間に、妻が狂気の世界をさまよっていきさま、こんなドロドロ人生は読んで楽しい。こういうドロドロを上手い筆さばきで造り上げられた文章は、ヒトの気持ちをうつ、感動する、素晴らしい。

美人で、自尊心が強く、兼家の求愛を冷淡に扱っていた彼女。藤原家の御曹司、色好みの男。よばい形式の求婚作法があっけなく成就する。「あのように気の強いあなたが しおらしく泣いてくれる・・・」「朝になって 妻の時姫と赤子のもとに帰っていく あなた・・・」「男の愛と肉体を よその女と分かちあう 屈辱・・・」

◎夕ぐれの ながれるまを 待つほどに 涙おほいの 川とこそなれ

解説：次に逢える夕暮れを待つ間、あなたを思う涙が、大堰川のように流れます

◎消えかえり 露もまだ干ぬ 袖のうえに 今朝はしぐるる 空もわりなし

解説：初めての夜離れ（よが一この言葉は知らなかった）、控えめに激しい閨怨（この言葉は知らなかった）の歌。

◎うたがはし ほかにわたせる 文見れば ここやとだえに ならむとすらむ

解説：引き出しの中に男の文を見つけた。よその女に送ろうとした文、「見たぞ」と知らせた。「ちょっと お前の愛を試しただけだよ」と出て行った。ヒトにあとを付けさせると「町で泊まれた」という。つらいが三日ほどすると、門をたたく音がする。夫が来たと思ったが開けなかった。また、町の女の家にも行ったのであろう。

蜻蛉日記の著者、道綱の母は自分のことを書き綴った。自分の気持ちを書き綴った。この人は高級官僚の娘、夫は時の人、一夫多妻の時代、普通ならば平々凡々、高級官僚生活を楽しみ、付き合い、同性異性との交遊も楽しみ、最高級の衣食住に恵まれていたのだろうが、モノを書く、表現するという楽しみを覚え、人生謳歌の時を過ごしたのではと、オレは思う、悲哀で歯ざしりしたかも知れぬが、できた文章がいい。ものづくり人生の極みなり。

「何に 一番活躍しているのかな オレのパソコン」と考えてみた。今は、このブログの文章を書いている、キーボードをたたいて文章を書いている。昨今、オレにとってなんでもない作業、なんでもないというのは、オレの日常にパソコンが素直に入り込んできているということだ。まだ 30 歳代の頃だったと思うが、友人がワープロを持っていた。その友人夫妻も、持っているだけで操作はできない、さわりもしないという代物だったが、誰かからプレゼントされたようなことを言っていた。「貸してくれる いちど 挑戦してみようかな」と言ってみると「どうぞどうぞ 持って帰って いつまででもいいよ 貸すよ」ということで自宅に持って帰った。一カ月ぐらい我が家にあったように記憶する、何度か電源スイッチを押した、画面が明るくなった、いくつかのキーを押してみた、画面の上にローマ字が現れた、一行書くと「わからない 次に どうすればいいのか」なんて思いながら電源を切った。何度かの立ち上げ、“名前”と“ありがとう”ぐらいが書けたような記憶があるが、それで終わってしまった。「こういうものは オレには 向いていない」と決めてかかった。

次に 20 年ぐらい経ち、オレも 50 歳前後になっていたころ、小林先生が「他業種 集いの会があるから 出席しないか」という。「そんな モノモノしいところへ 絵を描いているようなものが 出たところで・・・」と思いつつ行ってみた。そのころのことはほとんど記憶にないが、大阪：本町のとある会社に誘われた。こじんまりしたビルの一室に 20.30 名ぐらいの人がいた、パソコンが並んでいた、それこそ大きな画面、今でこそこの家庭にもある大きさの TV 画面、そこにパソコンの画面が映し出されていた。「なにか 絵 お持ちですか」と言われ、スケッチブックに描かれた絵を手渡すと「画面を 見て ください」と若いあんちゃんが大きな画面を指さした。今なら「なんだ photoshop の 画面じゃないか」と簡単に言えるが、画面の中で、オレの絵が、ゆがむ、ねじれる、色が反転する、正転する、と踊りまわっていた。「ふうう すごいなあ」といいながら、そうは驚かなかった。もう当時、TV 画面で、コマーシャル画面で、そのような画像がどんどん出ていたのかもしれないが、「なんだ パソコンで こんなことができるのか あの驚きのコマーシャル画像は パソコンで作っていたのか」と思ったのかもしれない。

当時多少貯金があった、陶器づくりに夢中だった、「窯が買いたい 電気窯でいい」と思っていたが、どこに備え付けたりいいのか、茨木市の街中では稼働できない、かといって、他の場所を用意する余裕はないと迷っていた。そんな折「パソコンを買わないか」「パソコンを買えば 仕事ができるよ」「パソコンで 絵が描けるよ」「いろは を 教えるよ」という人がいた。「日本橋の 店に行き ここに書いてあるものを 買ってくればいい」「買ったら、ここに持ってきて 調整してあげるから」と話はとんとん拍子に進んだ。当時パソコンは高かった、安物の乗用車並みだった。デザイナーの生業を持っていた、蕎麦屋：むもんの三宅さんは「とんでもない そんなもんでない オレなんか 一千万円 二千万円 使ったよ」「当時のパソコンは 動きが鈍く 画面が回転するのに カッ カッ カッ と 断続的にしか動かなかった それでも便利な機械だった あれがでてから 手造りなんて 考えられないよ」と酔っぱらっては面白そうにそんな話をする。

買ったのはリンゴのマークが付いた“マック”というパソコンだ。本体は 50 万円足らず、メモリが 2 本で 15 万円、記憶媒体、プリンター、adobe のソフト illustrator と photoshop 等々、全部合わせると 120 万円ぐらいになった。毎日立ち上げては、字を書く、絵を描くという基本操作を繰り返したが、「これは パソコンでは 絵は描けないね」「絵はやはり 手描きだ」と思いようになり、1 年が経った。

コンピューターグラフィック<CG>のプロにはなれなかったが、こんなオレが、生意気にもキーボードをたたいて、字を書いている、簡単な絵を描いている。今では町中どこのオフィスに行ってもでんとモニタ画面が並び、何でもかんでもパソコンで処理をしている。パソコンというのは実に便利な機械だ、「事務能力はあっても まさか絵が描けるわけでも まさか音楽が奏でられるわけでも」と思っていたつい先日を通り越し、それこそ何でもかんでもこなすようになっていった。絵画の世界も、手描きは趣味の世界で、仕事の分野は全部コンピューターにお任せ、なんてことになりつつある。パソコンでできないのは、漫才か落語ぐらいかと苦笑する時代だ。

今のオレ、これで、文章を書いている。長い念願だった、画集や、案内状や、自身の印刷物は簡単に作れる、ホームページも持ち、自身の絵、自身の日記、自身の写真などが載っている。パソコン時代、パソコン様々である。

夕方の5時、この季節、外は暗くなりかけている。小屋の中に入ると先発隊の、河瀬・高田・川添の三人が待っていた。机の上には旨そうなものが並んでいる。この小屋、“いこいの里：久多キャンプ場：5000円”という名前。河瀬さんが探してきた。住所は京都市となっているが、いつも通る滋賀県の山への道、途中から朽木に向かう道、梅ノ木を左に曲がって5分ほど走ったところに在る、京都市がこんなところまで出張しているのだ。

この道、国道367号線というらしい。40歳前後の頃、近所の散髪屋の主人“むねちゃん”と武奈ヶ岳を登って湖西線の比良駅まで歩いたが、交通機関の話になると記憶が飛んでいるが、たぶん電車バスを乗り継いでこの道を通っているはず。それからしばらくして、阪口さんと三条京阪駅で待ち合わせ、梅ノ木行きバスに乗ったことは覚えている。現在は道が整備され、車はブンブンとぼしているが、当時の道は細く、曲がりくねり、村の中を歩いていた。今でも昔の道が右に左に見え隠れする。バスには補助に車掌が乗っていた、対向車がある時や、村の中の狭いところでは車掌が先導していた。阪口さんとも、坊村で下車して武奈ヶ岳に登り、同じように比良駅まで歩いた。そのあと何度もそのバスに乗った、ぐるり一周して帰りのバスにも乗ったことがある。最近では“高島トレイル”や“芦生の森”に足しげく車で通うようになり、この辺りは詳しいものだ。

先日の“勝山：東山いこいの森：3500円”は狭く板張りの床だけに比べ、この小屋は“シンク・冷蔵庫・4人用二段ベッド”が備え付けられている。川添さん持参の赤ワインをいただきまずは乾杯、いくつかの並んでいる“あて”をポリポリつまむ。なんと、小屋の中にはカメムシが10匹20匹いる、つまんで捨てるもなかなか数が減らないぐらい、外からどんどん補充されてくる。滋賀県のこの辺りはカメムシの生息地なのか、普通に五角形のものと、形の違うものもある、図鑑を見る限りこいつもカメムシらしい。

「今日は 澤山さんの 三回忌です」「え ああ そうか 3年か・・・」早いものでもう3年経ったようだ。今日がその日だったとは知らなかった。3年前、前日に「危篤 みたい」とメールが入り、翌朝メールを開けると「深夜に亡くなった」と書かれていた。当日、キヌサンと仕事が終わり次第夕方出発して、森で一泊し、百里ヶ岳に登ろうと約束していた。仕事場に電話を入れると「え 早かったなあ 通夜が明日なら予定通り出発して 明日帰ってから 通夜に行こう」と予定通り百里ヶ岳を歩いた。遠敷（おにゅう）峠に車を置き、百里ヶ岳、木地峠、福井県側の根来まで下り、遠敷峠まで登り返した。着替えて車で出発したのが3時ころだと思う、この季節、夕方の陽の光が峠の石の壁をキラキラ輝かせていた。天狗の団扇、柄の木の葉が黄色く、山のあちこちに赤い葉、黄色い葉が、目に焼き付いた。

澤山さんの三回忌だということはすっかり忘れていたが、山に来るとよく思い出す、笑顔も口調もそのままの彼が出てくる。亡くなる一カ月前に病院に見舞いに行った。車いすの彼がうれしそうに笑っていた、1時間ほど話をした、「えらいことになってしまった」という覚悟の言葉をぽつりと聞こえた。「車で 大台ヶ原でも 気晴らしに 遊びに行きますか」「行きたいなあ 行けたらなあ」「行こう」と言いながら実現しなかった。

「これを飲んでみれば 今 2錠ぐらい」薬をもらった。“リマプロスタール5”WEBによると「末梢血管を広げる血流の改善により しびれ 痛み 冷感の改善」と書かれている。痛み、腰いた、ヒザいた、そんな関節痛で悩んでいる人はたくさんいる、みなさん持病になり、頭を悩ませている、「ならこの薬」「ならこの体操」「なら私が」とこれまた、たくさん回答が出ている。オレが膝を痛めてもう一月になる、当時のきつい痛みはないが、なら走れるか、なら登れるか、という自信はなかった、一月の間に「治らないなあ」「もう登れないのでは」「春を待たないと」と嘆いていた。この薬のおかげか、夜は寝ながら痛みは感じなかった。一日3錠、一週間経って薬が効いているとありがたい。安物だと聞きながら、サントリーの箱入り赤ワイン、旨い、ぶどうジュースのアルコールいりだ、ほとんどいただいた。膝は痛くない、眠剤を飲み朝までぐっすり寝むれた。

翌日は一人が帰り、4人で朽木の日曜朝市へ、野菜をたくさん買い、木地山に向けて走った。「簡単な山ですよ」「上の池がきれいですよ」と車を止めたところで小雨がきた。「こんな雨ならいやだ」「雨はうっとうしくなる」どうもみなさん弱音、歩く気満々のオレをしり目に帰ろうという、残念。けれども車が走り出すと雨あしが強くなってきた。大阪に近づくと天候は晴れだった。

友人から絵ハガキが届いた。表には一行「先日はありがとう」と書いてあった。友人が、生まれ故郷を散策中どこかで買い求めた一枚を送ってくれたものだろう。青空に映える松山城の全景写真、横に子規の俳句一行が添えられている。この俳句を詠んだ時に、はっとしたのは、「秋より高い」という文字の響きだ。歌はわからない、詩はわからない、と嘆いているオレだが、この言い回し、表現の発想に驚いた、これはいい、素晴らしい、と思った。東京の大学に学んでいた彼にとって、高い建造物、立派な構造物はいくつも見ているはず、そんな彼が故郷の天守閣を仰ぎ見て「やっぱり いいねえ 故郷の城は」という気持ちが伝わってくる。ぼやきは、絵葉書の横に写っている城が、きれい過ぎる、絵ハガキ専門で上手い写真家の最近撮った仕事、いかにも絵ハガキ表現、これはいただけないと思った。オレなら、子規が生きていた当時の、古びた写真、俗にいうセピア色の写真を素朴に載せるんだがな、と、余計な一言をいってしまう。明治24年と書かれているが、子規がこの俳句を詠んだ年だろう、120年以上は経っている。

「そのものと解説」ということが気になる。早い話、上記の俳句、「おお おもしろい」と思うだけが、感じるだけが一番いい。これだけでいいのだが、子規とはどういう人、松山城はどこにある、だれが住んでいた、今どうなっている、というようなまわりの諸々、現象に興味を持ってしまう自分を戒めている。これはどおいうことかということ、そのものの本質、そのもの自体を味わう、感じる、愛でるという考え方を持たなくてはいけない、そうすべきだ、とオレの主張。若いころに画集をパラパラ見ながら、別の本でゴッホの生涯だとかゴーギャンの生き方考え方に魅力を感じていった。マチスやマネといった、普通に描いていた人、絵はすごいが生き方暮らし方はごく常識的でつまらない、なんて思ってしまったが、今から考えるとこれはいけない、主客店頭なり。絵ならまだ中身はわかるが、ほかのもの、思想でも数式でも、わからないのでその方のひととなりを知ることで理解しようとするのは、道筋から外れている。

二十歳頃に、奈良駅前の商店街で、岡潔という数学者を見かけたことがある。文化勲章をもらった数学者、奇行の先生、奈良女子大の先生、常にレインシューズを履いている人、ということは知っていた、新聞に寄稿文を載せているのも知っていたが、読んだこともなかった。そんなけったいなおっさんが、というか爺さんが、黒い背広にレインシューズ姿の先生、商店街の食堂のショウウィンドーをじっと見ていた。「あああ これが あの先生か」と見やった。先生が残した数学の事、エッセイの事はまるで知らないが、その奇行、そのえらさ、だけしか知らない格好の悪い自分にハットする。WEBで調べると、数学の話、エッセイの話はなかなかのものらしいが、いまさら見ないことにします。ただたくさんの語録の中に、下記の言葉があった。これは気に入った、これはオレも賛成、絵もこれでいかなくは。「数学のもとになるのは頭ではない。情緒だ。数学は印象でやるもので、記憶はかえって邪魔になる。忘れるものはドンドン忘れて行く。これが極意です」自分の話で恐縮ですが、いうのも恥ずかしいが、オレも数学は好きだった、少しだけいい成績だった。そのころに思ったことは「数学は 感性だ ひらめきだ」「頭の中で 考えが出てくる その式を書けば 答えになっていくのだ」なんて思っていたが、絵を描きだし、数学から離れると、一年もたてば何もかも忘れていった、感性が離れていった。大先生の言っていることはもっと深いものだろうけど、いいことをおっしゃっている。

ヒトが何人もいる以上、何人分もの文化や考えや意見があり、反論がある。スパイラル (spiral 螺旋・渦巻) という言葉が盛んに使われる。戦争に、政治に、経済に、社会生活にこのスパイラル現象が盛んに起こっている。この現象を起こしてはいけない、一度二度の行きつ戻りつで渦巻きをストップさせないと渦巻きは加速し大きくなっていく。複雑な構造は、本質を飛び越え大きなエネルギーを孕む。大きなエネルギーを孕んだ、思考の権化、思想の権化、喜怒哀楽の権化が、ヒトそれぞれによくはない、悪くなるばかり。ヒトは最初の直感、初めての感性を大切にしていかなければならない、そうすることが大事だと思っている。何事も、パッと見て、ハット聞いて、ソッと感じて、その最初の印象、その最初の好き嫌いの判断、これがこれ以降を左右する。そう悟ったが、これも若いころにわからないとねえ。

図版は 12年前の展覧会<ギャラリーみずの> ここの年内で閉じるらしい、残念なり。